新　潟　日　報
2025年(令和7年)7月2日（水曜日）

島ひとまらり……

「楽しく働く」背中追い

酒蔵6代目へ I、Uターン

和田航季さん、麻帆さん夫妻

もともとは継ぐつもりのなかった家業の酒蔵。だが、日本酒文化を発信し続ける両親の姿が、社会人になってから胸に迫った。和田麻帆さん(29)＝旧姓・平島＝は、夫の航季さん(28)＝川崎市出身＝と4月、尾畑酒造に入社。創業130年を超す老舗を未来につなごうと、10年ぶりに故郷へUターンした。

海外輸出を始めたのは5代目蔵元の母、尾畑留美子専務(59)と、父の平島健社長(60)だった。国内外を飛び回り、月の半分は家を空けるのが当たり前。「なんて忙しい家に生まれたんだろう」。家業の広がりとは裏腹に、前向きな思いは抱けず、大学進学を機に〝片道〟のつもりで島を離れた。

都内に就職したが、東京で働き続ける人生が自分に合っているのか、次第に疑問を感じた。「東京で子育てできるんだろうか」と不安もよぎった。

学校蔵の酒造り体験プログラムを手伝う和田航季さん（中央）、麻帆さん（左）＝6月、佐渡市西三川

当時交際中だった航季さんにふと漏らす。「東京で働く人以上に、うちの両親の方がなんだか楽しそうなんだよね」

IT企業に勤めていた航季さんにとっては、2022年に2人で訪れた佐渡が転機になった。廃校を再生した「学校蔵」は尾畑酒造の第2の蔵であり、交流と学び、共生の拠点だ。「新しいことに挑戦する蔵なんだ」とわくわくした。海外志向の強い自分と、輸出を伸ばそうとする酒蔵の姿勢も重なった。

23年の暮れ、結婚とUターンを報告した。一度も「戻ってこい」とは言わなかった健さん、留美子さんは心から喜んでくれた。そして、「2人が思っている以上に早く、経営を譲ることになるよ」と告げられた。

伝票や販売ツールの作成、SNS広報…。麻帆さんは入社以来、母から「五月雨のように降ってくる」業務と向き合う日々。着実にクリアすることで、経営を担う自信が育つと信じる。

航季さんは学校蔵の体験プログラムなどに参加しながら、酒造りを学ぶ。営業も精力的にこなす中、海外出張では顧客のある問いかけに答えに窮した。

「獺祭（だっさい）とはどう違うんだ？」。海外展開を加速させる山口の銘酒が、世界での評価基準だと知った。「自分たちの存在意義を問われている」と痛感した。

「継ぐ」と決めてから、2人は本格的に日本酒を飲み始めた。「四宝和醸（しほうわじょう）」を指針に掲げる尾畑酒造。その酒は、米・水・人、そして佐渡の風土の四つの宝にこだわり、すっきりとした辛口が持ち味だと感じている。

こうした酒蔵のスタイルを「もっと強いものにさせたい。一つのストーリーとして語れるようになりたい」と口をそろえる。

その先に描くのは、雇用を生み、人を呼び込む島づくり。語る2人の顔は、どこまでも晴れやかだった。

（佐渡総局・渡辺伸也）

＝随時掲載＝